

Growing

タケル

グローイング

空には厚い雲がかかり、シトシトと降る雨は大地をゆっくり濡らしていった。

「もういい！」

小さな村の集落に、甲高い声がこだました。

なぜだろう。

最近なんだか妙にイライラしてしまう。

勉強や友人関係、将来のこと、今降ってる雨にさえイライラする。

僕は家を飛び出し、行く当てもなく、ただどこかに向かって走り続けた。

わからない。なぜ自分はこんな風になってしまったんだろう・・・

少し前まではこんなことなかったのに。

走りながら僕は、自分を少しだけ見つめた。

気付くと僕は見知らぬ場所に足を踏み入れていた。

「ここ、どこだ？」

急な不安が心の底から込み上げてきた。

無心になって走っていたから、どうやってここまで来たか分からなかった。

「はぁ。」

またイライラすることが一つ増えてしまった。

数えきれないほどの憤りを抱えて、僕は通ったと思われる道をただやみくもに進んでいった。

それからどれだけ歩いたのだろう。

一向に知っている道が現れない。

もう全てが嫌になってきた。

いっそこのまま帰られなくなった方が。

そんなことさえ考えてしまった。

自然と涙が僕の頬を伝った。

それでもなお歩き続けると、ふっと目の前に奇妙な神社が現れた。

建物の周りは手入れがされていないのに、中はとても真新しく、どこか神秘的であった。

僕は涙をふき、この建造物に操られるように吸い込まれていった。

中に入ると、なんだか不思議な気持ちになった。

なんだかゆったりとした、今までのイライラがなくなっていくような感覚、僕はその建造物の中でゆっくりと眼を閉じた。

「う・・・ん」

僕はゆっくりと目を覚まし、身体を起こした。

なんだろう。何だかとても良い夢を見た気がする。

これ以上ないほど幸せな夢、こんな気分はいつ以来だろう。

気付くと辺りは真っ暗になっていた。

雨も少し強くなっている気がする。

街灯一つないこの暗闇の中で、僕はひっそりと思いをはせた。

あれからどれだけの時間がたったのだろうか。

今頃母さんは僕を探してくれているのだろうか。

父さんだってそろそろ仕事から帰ってくる。

そうならば、2人で必死に僕のことを探してくれるのだろうか。

この変わり果てた僕を、本当に必要としてくれるのだろうか。

僕は起こした身体をもう一度横にして、再び眼を閉じた。